

にとどまるが、彼の自意識は視野に入らないのだろうか。そもそも功名にはやる人ばかりだっただろうか。西郷隆盛ばりに、「名もいらず、官位も金もいらぬ人」は、本書の観点からどのように位置づけられるのか。

本書が、文字面の理屈にとらわれず、思想家らの気分や情念の次元から深く思想を理解しようとするのは、尤もである。ただ、動機づけからの解明に力点が置かれ、しばしば青年期の著述や逸話に注目する。青雲の志に着目するのも一法であろうが、それでは思想家が生涯でいかなる知的達成を遂げたのか、いかなる将来構想をうち立てたか、ということに目が届きにくくなる。小楠も埒外になってしまう。その点、本書とは異なる思想史の方法も必要であろう。

以上、縷々注文をつけてしまったが、本書の研究の密度の濃さは圧倒的で、非常に参考になる。一読者として公刊を喜びたい。

(学習院大学教授)

川村邦光著

『出口なお・王仁三郎』 ——世界を水晶の世に致すぞよ——

(ミネルヴァ書房・二〇一七年)

福家 崇洋

本書は、宗教法人大本の開祖出口なおと聖師出口王仁三郎の評伝である。

先行研究として思いあたるのは、安丸良夫の『出口なお』(一九七七年)であり、村上重良の『評伝 出口王仁三郎』(一九七八年)などである。大本の研究に触れた人間なら誰でもわかるが、なおのお筆先や王仁三郎の『靈界物語』など読むべき一次資料は膨大にあり、どちらか一方を論じるだけでも容易ではない。にもかかわらず、大本本部から提供された写真等の貴重資料を駆使して、基礎資料の水準を大幅に引き上げながら、しかも二人まとめて論じるという偉業が達成されている。その意味で、私の読後感には、新刊にして古典というものであった。

こうしたことが本書で可能になったのは、著者が宗教学や民俗学の分野で大本を論じてきたことが大きい。一九八〇年から近年まで、出口なおや王仁三郎、昭和神聖会などが分析されてきた(参考文献)。したがって、本書は書き下ろしの体裁をとりながら、重厚な研究成果に裏打ちされた叙述となっており、

この点が質量双方の厚みを保証している。

もうひとつは分析視覚である。これは、本書で「ステイグマ (stigma) とカリスマ」というコンセプト、またステイグマとカリスマが社会的に成立する行動パターンとして「籠り」と「巡り」というコンセプトを用いて」(本書、一一頁)と説明されている。安丸良夫は「通俗道徳」という概念を用いて、出口なおが道徳実践を通して社会批判へいたる過程を描いたが、この方法を王仁三郎に当てはめることはできなかった。著者は、ステイグマ化、自己ステイグマ化、カリスマ化という視角によって、なおと王仁三郎双方の教祖化過程を通史的に扱うことに成功している。

やや筆を急いで内容に立ち入ってしまったが、章構成と内容を以下に紹介しておきたい。

序 章 峠を往還する

第一章 「因縁の身魂」と神がかり

第二章 人助けと良の金神講社

第三章 若き日の王仁三郎と修行

第四章 なおと王仁三郎の相剋と共闘

第五章 大正維新と立替え・立直し

第六章 第一次大本弾圧事件と再建

第七章 人類愛善会運動と昭和維新

第八章 昭和神聖会と第二次大本弾圧事件前後

第九章 第二次大本弾圧事件

終 章 新生する大本

序章から第四章までが出口なおを、第三章から終章までが出口王仁三郎を扱っている。前半では、なおが神がかりを起こして、良の金神との対話をへて、世の立て替え・立て直しを伝えるお筆先を書くにいたるプロセスが描かれる。なおの言葉でいえば、「牛糞が天下を取る」過程である。

このお筆先を読み解いて公表したのが王仁三郎である。後半では、若き日の王仁三郎の写真や歌を効果的に用いながら、各地での修行やなおとの相剋と共闘をへて、大本の教祖となる過程が描かれる。王仁三郎の時代になると、なおの教えに国家神道を接合しながら「大正維新」「昭和維新」といった実践活動への傾斜が見られるようになる。しかし、それは同時に大本への二度の大弾圧を呼び起こすものでもあった。

本書冒頭では、国体及び私有財産の変革を取り締まった治安維持法(一九二五年、一九二八年改正)で弾圧される大本像が押し出されている(「はじめに」)。いわば、国家権力に対峙する大本像である。一方で、一九二〇年代以降の大本をどう評価するかは現在でも見解がわかれる。日本の「ファシズム」として国家権力に迎合したのか否か、迎合したとすれば、二度の弾圧をどう歴史的に理解すればよいのかという問題に突き当たる。

村上重良は近代天皇制のイデオロギーとの異質性を認めつつも、下からの異端的なファシズム運動とした。安丸良夫は、な

おの「民衆思想」に天皇制を批判する契機を見出す。王仁三郎については「皇道ラディカリズム」として大枠では旧来の「ファシズム」の範疇に組み入れつつも、「異端」的存在としてやはり含みを持たせた位置づけとなった。

これに対して、著者は、大本における天皇制ファシズム傾斜の危うさをぎりぎりまで見極めつつ、民衆にも共有されうる反天皇制の契機をえぐりだそうとしている。ここが本書の肝ではないかと思う。著者は次のように述べる。「こうした王仁三郎の翻訳・編集は、国体デイスクールを利用して、官憲の執拗な介入・干渉を回避し、無用な争いを避けようとする意図があったことは確かだろう。その一方で、国体デイスクールの流用し、包摂し、国体デイスクールの膨張させた超国体デイスクール、いわば皇道を騙って、天皇制神話・国家神道を凌駕する大本・国体デイスクールの構築していくことにもなった。それこそが官憲の最も忌み嫌うデイスクールの実践だった」（本書、二二三頁）。付言すれば、同じ天皇制批判でも、出口なおと王仁三郎とは異なるものとして書き分けられている。民俗的世界が濃厚なおの素朴で原初的な天皇制批判と、天皇制文明社会においてもなお存立可能なものとしてある王仁三郎の際どくて危うい天皇制批判である。

このように、大本の言説は、帝国日本の正統な国体言説と重なりつつも、微妙にずらすものである。当然間口は国民に大きく開かれ、そこに彼らが信者として参与していく余地がうまれ

るが、その行き着く先は、日本政府が思い描く「臣民」とは必ずしも一致しない。この国体言説をめぐる微妙なズレこそが、国家権力にとつては大いなる脅威であり、正統をおびやかすものであった。

もちろん、こうした国体デイスクールは出口王仁三郎らごく一部の幹部だけが理解できたはずで、大本全体として見れば「ファシズム」以外のなものでもないのではないかという批判は存在するだろう。それゆえ、本書では、大本の信者まで視野をひろげて考察される。著者は、「天皇親政の翼賛が大本の『顕教』とするならば、天皇親政の輔弼がその『密教』、王仁三郎をミクロ菩薩・統治者とした『ミクロ神政成就』がその『秘教』と言うことができる」（本書、三七二頁）として、大正維新から昭和維新にかけて、秘教的部分が信徒でも共有されていたとする。その際、王仁三郎と天皇制の関係が焦点となるが、著者は「天皇制を借景として転用し、擬似天皇化、二重天皇制化、もしくは天皇のパロディ化を通じて、聖なるカリスマ的権威・権力を顕示していたのだ」（本書、三九一頁）と指摘する。

こうした視座は、宗教社会学者の対馬路人氏が提起する「理念の天皇制」と重なるのではないかと思う。また、社会運動・思想史研究から右派社会運動（日本主義や天皇信仰など）の超国家性を検討してきた評者も共鳴できるものである。やや蛮勇をふるっていえば、一九三〇年代から敗戦にかけて、理念・虚像としての天皇（制）が帝国日本の国内外へと拡散していくこと

で、現存する天皇制の内実を掘り崩していったと考えることはできないかと考えている。これまで、国民国家論との関係から天皇制下の国民統合の側面が強調されてきたが、近代天皇制から象徴天皇制へといたる連続性のなかの「逸脱」を掘り起こしていくことが必要ではないかと考える。以上の仮説を考えるうえで、本書は有益な示唆を与えてくれる。

さて、評価しうる点ばかりを書き連ねると、本書を「護持」するディスクリールのように思われてしまうので、私の専門に引きつけながら、若干の感想を述べてみたい。

本書でも多くの紙幅が割かれているように、大本は右派的な政治・社会運動に乗り出した点がユニークである。こうした点は国柱会にもみられるが、宗教団体としては珍しく、戦前の大本の大きな特徴といつてよいであろう。それゆえ、大本の活動を読み解くうえで、社会運動史の知識（とりわけ国家改造運動との関係）が不可欠になる。本書もこうした点につき引用・言及されているが、必ずしも充分ではなかったように思う。大きくいえば、大正維新と昭和維新の箇所である。

大正期における大本と右派社会運動の関係は、本書ではほとんど言及されていない。昭和期に入って、北一輝との関係として、北と出口王仁三郎の文通や「北の著国家改造原理は出口の意を受け、北が執筆したるものにして、猶存社は或機会に於ける大本教の実行機関なりとの説あり」（本書、三二七頁）などの

文言が引用され、王仁三郎と北一輝の親密な関係とされる。ただし、引用の内容はかなり盛られた内容で、上海で書かれた北の『国家改造案原理大綱』（一九一九年）に王仁三郎が関わったとは初耳である。

また、北一輝と大川周明は、王仁三郎をほとんど評価していなかった。北は日蓮宗に帰依しており、大川も松村介石の道会信者であったから、「邪教」扱いの大本とは当然ながら距離があった。

しかし、猶存社と大本は必ずしも無関係とはいえない。この会は満川亀太郎を世話人とする老社会を先鋭化させたもので、満川を中心に一九一九年に結成され、大川周明、北一輝も参加した。北や大川ほど信仰心の篤くなかった満川は、大本の存在に着目し、王仁三郎を老社会に招こうとしたが、うまくいかなかった。代わりに老社会で大本について講演したのが当時信徒であった木島寛仁（寛之）であり、彼は満鉄勤務時代から井上昭（のち日召、血盟団事件の首謀者）と同志の間柄にあった。

その後、猶存社が実践運動に乗り出していくと大本の影が見えかくれする。これは一九二〇、二一年に皇太子妃の決定をめぐって紛糾した「宮中某重大事件」との関わりである。老社会に出入りした自由労働者の角田清彦（彼は大本の信徒でもあった）が、大本から運動資金を引き出して猶存社などの結社に配ったと官憲記録にある。この事件が問題化した時期と、大本の第一次弾圧がほぼ同時期であることを考えると、本書でも時代

背景として一定の言及があってもよかったかもしれない。あわせて、本書のテーマである、大本と天皇制の関係を一考するものともなるだろう。こうした国家改造運動の資金供給源としての大本は、昭和期の国家改造運動とも関連し、やはりこの点も官憲の目の敵になっている。

また、国家改造運動は、国内・国外双方の改造が交差しながら進んでいったことを抑えておく必要がある。たとえば、先述の猶存社は、アジア主義にもとづく世界革命論を提起する。これは、第一次大戦後の共産主義革命運動や民族独立運動を強く意識したもので、人種、民族、階級という新たな主体の属性を視野に入れて、日本を核としたアジアによる世界革命を志向するものであった（ただし朝鮮や中国の民族独立運動は支援の対象とならない）。

よって、一九二〇年代以降に進む大本の対外戦略（いわゆる「王仁入蒙」や人類愛善会）も同時期の他の対外的社会運動と関連付けて描くことでよりリアリティが増したと思う。これまで先行研究で明らかにされてきた動きとして、黒龍会のメンバーで中国革命に関与した末永節の太高麗国構想がある。末永は肇国会を結成し、間島で「太高麗国」という理想の共同体を建設することを目指した。肇国会と「王仁入蒙」は、構想として似ていただけでなく構成員も連続していたが、こうみることでは、「王仁入蒙」を別の角度から捉えなおすこともできるだろう。また、こうした動きが内田良平による出口王仁三郎への高

い評価や、さらには昭和初期における内田と出口による昭和神聖会の結成へとつながっていくことをクリアに把握できる。

では次に、昭和期の国家改造運動との関係に移ろう。本書で言及されているのは黒龍会主幹の内田良平や、北一輝に師事していた西田税である。出口王仁三郎と内田は一九三四年に昭和神聖会を結成した。先述のように、内田と出口を結びつけたのは東アジア進出をめぐる動きであった。ただし、一九三一年に黒龍会を中心に大日本生産党が結成され、国内改造に活動が移行する。生産党は右派社会運動を糾合して生まれたものの、大衆との接点は関西の一部の労働組合を除いて限定されていた。よって、大本が持つ膨大な大衆動員力に白羽の矢が立てられたものと思われる。

一方の西田税とは、北一輝もふくめて、この時期大本ほどの程度関係があったかは不明である。というのも彼らの活動は大衆運動を目指していたとはいえず、陸海軍の上層部や青年将校との個人的同志的関係を軸に動いていたためである。

さきの大日本生産党もそうだが、この時期の右派社会運動は、大衆運動や議会進出を志向する動きが顕著にみられる。たとえば、満州事変後、国家社会主義をめぐって無産政党が分裂して新日本国民同盟という国家社会主義政党が誕生する。幹部は下中彌三郎（平凡社社長）、佐々井一晁、満川亀太郎、中谷武世らである（下中、中谷はのち脱退）。

新日本国民同盟は大本と関係があった。幹部のひとり貴志弥次郎陸軍中將は、かつて奉天特務機関長として「王仁入蒙」の工作にあたったことがあり、彼の親族である中谷とマヘンドラ・プラタプ（インド独立運動家）を一九二八年頃、王仁三郎に会わせている。また佐々井とともに代表格となる満川も、先の本島寛仁を通じて昭和神聖会、昭和青年会としばしば運動し、本島を新日本国民同盟の幹部に招いている。以上の動きの背景には、やはり大本の大衆動員力と資金力に期待していたことがあったと思われる。大本の国体デイスクールも官憲には不敬以外のなにものでもなかったが、これら異端の連鎖も危険視された。右派社会運動と大本の関係は、官憲のフレイムアップの可能性もあつて慎重な検証が必要だが、大本七〇年史の編纂資料を垣間見たかぎりでは、すべて虚報で片付けられるものではないようだ。

以上、いくつか例をあげたように、本書において、大本と国家改造運動（「大正維新」「昭和維新」）の関係を充分描いているとはいいたい。国家改造運動は日本社会の周縁的な存在であったものの、帝国日本のトータルな変革を志向する運動であり、ここに大本がどのように関わったかを描くことは、大本の変革を見極めるうえで重要な指標であつたと考えている。ただし、これはあくまで評者の見方であつて、宗教的共同体における教祖と信者、信者同志の関係性にこそ、天皇制を超えるコスモロジーが発動していく契機となるという考えもあるだろう。

その意味で、本書は、大本における国体デイスクールに着目し、正統なる政府の国体言説との対決に比重が置かれていて、国家改造運動における横の連環の記述が弱くなったことは仕方がないといえる。これは「あとがき」に書かれているように、著者の天皇制に対する強い問題意識がそうさせたとは考えている。振り返れば、今回の天皇の「おことば」に端を発する退位劇において、一部の知識人が象徴天皇制の「護持」及び国民統合の先導役を予見できながら務めていたことを鑑みるならば、本書を通して、数々の公権力の弾圧に耐え抜いた大本の軌跡と、その抵抗のあり方を現代日本社会に再現しようとした著者の先鋭な問題意識に学ぶべき点は多いといえよう。

（京都大学准教授）